

雨傘運動における媚態、意気地、諦め

——「いき」の内包的構造を通して、運動における香港人と政府のふるまいを検討する

李臻文 (ジョゼフ リー)

1. 前言

2014年9月28日、数千数万にのぼる香港の学生と市民が、金鐘、旺角、銅鑼湾などの地区において、大規模な占拠運動を行った。運動に参加した人の多さ、継続期間の長さ、影響面の広がり、そして参加者が示した平和的な理性の点で、香港の歴史上、さらには世界の歴史上においてもきわめて稀な出来事であった。運動において、警察が放った催涙弾に対し、デモ隊が雨傘で対抗するという衝撃的な映像が何度も映し出されたため、外国メディアはこれを「雨傘革命」(Umbrella Revolution)と呼び、現地の学者によって「雨傘運動」(Umbrella Movement)と正式に命名された。この運動については、知識人の間や社会運動の文脈で、すでに多くの論述があるが、主として運動の成否や長短を議論するもので、哲学の枠組から分析を行ったものは数少ない。この面での欠落を埋めるため、日本の哲学者である九鬼周造が代表作である『いきの構造』で提示した内包的構造を利用し、香港人と政府が運動において媚態、意気地、諦めが体现されているかどうかを検討したい。

2. 香港人と政府が作り出す「媚態」

「いき」は日本の美学意識における独特の感性であり、その原型は江戸の商人と遊女との二元的関係およびお互いに作用し合う感情の動きにある。九鬼周造は『いきの構造』の第一章「いきの内包的構造」において、「いき」を構成する内容として「媚態」、「意気地」、「諦め」という三つの特徴が含まれると述べている。

九鬼周造は次のように述べている。「媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。……媚態は異性の征服を仮想的目的とし……距離を出来得る限り接近せしめつつ、距離の差が極限に達せざるこ

とである¹。」言い換えるなら、「媚態」とは、自己と他者（「異性」とは、「別の性」として理解されるべきではなく、自己と異なる「他者」である）との二元的対立関係である。この関係の絶妙な点は、双方がともに一元化に進めようとする欲望をもちながら、同時に二元性を維持しようとするところにある。九鬼周造が言うとおりに、「異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する」のである²。雨傘運動に戻ると、香港人と政府（中央政府と特別行政区政府を含む）の初期の相互関係は、まさに媚態を形成する条件に適合する。すなわち両者は長い時間をかけて、2017年の行政長官の選出方法をめぐり、指名委員会の構成をどうするか、「民主的手順²⁾」とは何か、最終的に何人の候補者が「ゲート入り」するかといった問題について討論し、それについて共通認識は得られなかったが、互いに二元的対立関係は維持していた。

民間側では、戴耀廷教授、陳健民教授、朱耀明牧師の「占中三子³⁾」は、「中環（セントラル）占拠」という手段に訴えて、市民的不服従運動を進めることを提起し、政府に対して香港人が真の普通選挙を求めていることを表明した。まさしく戴耀廷が言うように、「市民的不服従運動は、「人々が誠実に、公正さに基づき、公開の、計画的で、限定的な違法行為によって、不公正な制度を改めようとする」として説明できる³⁾」。

政府側では、特別行政区長官である梁振英や政務庁長官である林鄭月娥〔いずれも当時〕ら主要幹部が「セントラル占拠」という手段も目的も許可しないし、違法行為も受け入れないことを度重ねて表明した。体制派の議員や体制派に賛同する左派グループ⁴⁾は、政府以上に法を遵守することの重要性を強調し、「占中三子」が不法行為を宣伝していることに侮辱を与えようとした。

中国側では、2014年8月19日に中央人民政府駐香港特別行政区連絡弁公室（中連弁）主任〔当時〕の張曉明は、数名の民主派議員と面会した際、梁耀忠から、中国共産党中央委員会は、民主派人士が行政長官選挙に立候補することを認めるかと尋ねられた。張曉明はその際にこう答えた。「君たちが生きていられることに、すでに中央の寛容が示されている。」張はのちに、もともとの発言は次のようなものだったと説明した。「一国二制度のもとで、一党専制を覆すことを主目的として掲げる支連会⁵⁾が、現在でもさまざまな活動を行うことができ、支連会のメンバーが立法會議員に当選することさえできること、それ自体が大きな政治的寛容を表している⁴⁾。」どちらのことばが張曉明の本心であるかはさておき、「雨傘運動」が勃発して以来、中央政府は一度も人民解放軍を出動させて「反乱平定」することはしておらず、「占中」に対する北京の立場は、「妥協しない」が「流血も避ける」という

¹ 九鬼周造著、藤田正勝全注訳、『「いき」の構造』、講談社学術文庫、2003、pp. 39-40⁽¹⁾。

² 同上、p. 39。

³ 戴耀廷「反思公民抗命与法治」（市民的不服従と法治について再考する）、『明報』、2014年11月12日。

⁴ 「張曉明試図澄清「活著論」継続引発争議 -BBC Chinese」（張曉明が「生きる論」を明確化し、論争の継続を図る）、http://www.bbc.co.uk/zhongwen/trad/china/2014/09/140913_china_hk_media_zhangxiaoming.shtml、2014年12月10日閲覧。

態度であることがわかる⁵。

欧米のメディアがこの運動を「雨傘革命」と呼んだ時、香港中文大学ソーシャルワーク学科の准教授である黄洪などの現地の学者は、「雨傘運動」と呼ぶべきだと主張した。なぜなら「学生が推進するこのたびの民主的社會を勝ち取ろうとする運動は、政權を覆そうとする意図はない」からだ⁶。以上のように、雨傘運動の初期には、双方が、緊張をはらんだ二元的対立關係を一貫して維持しながら、相手を消し去ろうとはしておらず、ここに媚態が生み出されているのである。

3. 1. 香港人が体現する「意氣地」

「いき」の第二の特徴である「意氣地」について、九鬼周造は次のように表現している。「(意氣地には)江戸文化の道徳的理想が鮮やかに反映されている。……「いき」には、「江戸の意氣張り」「辰巳の俠骨」がなければならない⁷。」簡潔に言えば、これは武士道に近いもので、「勇ましき」「勇敢さ」「豪俠ぶり」といったキーワードが連想される。「雨傘運動」全体を見渡すと、香港人にはまぎれもなく多くの勇ましい行為があり、「意氣地」をはつきりと示している。

運動の初日——2014年9月28日——、多くの市民が金鐘の夏慤道(ハーコートロード)の海富中心(アドミラルティ・センター)一帯で、学生に声援を送り、警察に道を開けるよう求め、政府総本部の方へと向かっていた(夏慤道の歩道橋がすでに封鎖されていたため)。しかし警察は人間の鎖を作って阻止し、もし群集が防禦線に向かってくるなら、胡椒スプレーを噴射すると警告した。

普段は過激な行動に出ることのない多くの中年の人々が、学生たちを支持するために最前線へと進み出た。マスクやゴーグルをする人もいれば、雨傘を広げる人もおり、多くの人が見知らぬ前の人の肩や腕に手を添え、ひるまず前に進んで、警察の防禦戦に突進しようとして、車が行き交う夏慤道を横切り、通行する車を徐行させた。しばらくすると、警察は胡椒スプレーの噴霧を開始し、命中する人もいたが、その他の人々は傘をかざして突進を続け、なんとか突破口を見つけ出し、群集は夏慤道の車道全体にあふれ出た。

夕方6時頃、警察はデモ隊に向かって催涙弾を発射し、多くの人が催涙ガスを吸って両目が刺すように痛み、涙を流し、悲鳴があちこちからわき起こった。しかしガスが消えると、群集はただちにまた結集し、より多くの市民が知らせを聞いて現場に駆けつけ、声援

⁵ 「中央底線：不妥協 不流血 蘋果日報 要聞港聞 20140928」(妥協しないが、流血も望まない)、<https://hk.news.appledaily.com/local/daily/article/20140928/18882345?top=4h>、2014年12月10日閲覧。

⁶ 「学者籲改称「雨傘革命」為「雨傘運動」- BBC Chinese」(識者が「雨傘革命」を「雨傘運動」と改称するよう呼びかけ)、http://www.bbc.co.uk/zhongwen/trad/china/2014/10/141003_hongkong_umbrella-revolution、2014年12月10日閲覧。

⁷ 前掲、九鬼周造『「いき」の構造』、pp. 42-43。

を送った。数日後、多くの市民がインターネット上の呼びかけに応じ、それぞれ金鐘、銅鑼灣、旺角の車道に座り込んで抗議し、その後長期に渡って場所を占拠することになった。こうして「雨傘運動」があちこちで開花したのである。

本当の勇氣とは、目の危険を知らながら、慎重に考えた上で、やはり勇敢に前進することを選択したことである。9月28日当日、恐れることなく胡椒スプレーや催涙弾に立ち向かった香港人は、まさにこうした勇氣を示したのである。

ベテランのニュース記者である呂秉権は、『明報』で「占中」当夜のことを次のように記している。金鐘の海富中心の添馬公園に向かう歩道橋から、車道の市民に補給をするために、占拠者は長いロープを使って大勢が必要とするものを下ろしていた。水、食料、マスク、食品ラップなどで、さらには人々の携帯電話の充電もボランティアで行っていた。「山のように多くの充電器や数千元もする携帯電話が吊り下げ袋に入れられ、多くの人がそこに名前を書き、全く見知らぬ人に手渡した。数時間後、みなが信義を重んじて袋の中の機器は完全に充電され、一つとして欠けることなくめいめいの持ち主に返却された。……運搬マージンをとられることも、袖の下を求められることもなく、送迎バスがあるわけでも、政治動員があるわけでも、集団署名があるわけでもなく、赤の他人が赤の他人のためにすすんで犠牲になり、輝かしい人間性を発揮したのだ⁸。」

こうした見知らぬ人同士の信頼、無条件の助け合い、そこに込められた義気は、まさに九鬼周造の言う「豪俠ぶり」である。

人々の心を最も揺り動かした義拳は、もちろん「香港スパイダーマン」と自称する14名の登山家が、獅子山⁶の頂上から10階建てビルくらいの丈の「われわれは真の普通選挙を要求する」という垂れ幕をつるしたことだ。ソーシャルメディアで画像を見たとき、人々はコンピューターで加工したものだと考え、このような切り立った岸壁に巨大な標語を掛けられるとは信じなかった。それが本物だと確認すると、市民はみな大いに感激し、これらの義士は、新しい獅子山魂を示したと称賛した。すなわち、香港人はもはや金儲けだけを考えるのではなく、勇敢に立ち上がり、民主、自由、平等、人権などの普遍的な価値を守り抜こうとしているのだ、と。

事実、占拠区域では毎日さまざまな義拳が見受けられた。積極的にゴミを拾ったり、廃棄物の分類を細かく行ったりする学生もいれば、ボランティア授業で占領地域の中高生に補習を行う教員や大学生もいた。土木建設業の労働者の中には、仕事が終わった後、木材を金鐘の占領地域に運び込んで、学生たちが使えるよう机や椅子をボランティアで作ったり、後にはメディアによって広く報道された「遮打道（チャーターロード）自習室」を建造したりした。義侠心を示したのは下層民だけではなく⁷、いろいろな階層の香港市民がお金や力を出し合って、さまざまなやり方で支援を行い、彼らの「意気地」を存分に示したのだ。

⁸ 呂秉権「占中人的犠牲与信任」（占中人の犠牲と信任）、『明報』、2014年9月30日。

3. 2. 政府が示せなかった「意気地」

それに対して、中央政府と特別行政区政府はさまざまな方策において、まったく「意気地」を示すことができなかった。

まず、中央政府はあらゆる世論マシンを動員し、「雨傘運動」を押さえつけ消し去ろうとした。『人民日報』は立て続けに「中環占拠」に対する論説員の文章を何日も掲載し、「香港の少数の過激な団体が、「真の普通選挙」を求める旗印を掲げ、「中環占拠」を実行に移した。……これは法治を踏みにじる違法なやり方だ」と指摘した。『人民日報』はさらに、「今回の運動はきわめて少数の人が香港を通して内地に「カラー革命⁹⁾」を起こそうとしている」のではないかと疑念を呈した⁹⁾。

「雨傘運動」と「カラー革命」を等号で結ぶのは、まったくお門違いである。占中三子のもとより、学連（香港学生連盟）⁹⁾や学民思潮¹⁰⁾も、中国共産党政権を倒すつもりはなく、「全国人民代表大会による8月31日の政治制度改革方案¹¹⁾の撤回」を求めただけである。時事評論家の程翔はこう指摘している。「中国共産党は、香港の「平和的占中」運動をいわゆる「カラー革命」だと規定したが、これは香港状況に対する重大な誤認、誤解であり、……香港内部の矛盾、および香港と大陸間のより大きな矛盾を広げるものであって、その悪影響は次の世代にまで及ぶ¹⁰⁾。」中国共産党の規定は、香港の政情を誤って判断したのではないとすると、共産党のお決まりの考え方から出てきたもので、中国と香港の政治制度改革問題の分かれ目を「敵味方の矛盾」にしてしまっている。六・四天安門事件以降、大陸の経済は急速に発展したが、政治的な視野や度量は、ここ30年来ほとんど進んでいない——かつては89年の民主運動を「動乱」と規定し、今日では「雨傘運動」を「カラー革命」と規定しており、その考え方は同一である。

「雨傘運動」があちこちで広まってから、特別行政区政府は、機動隊を出動させ催涙弾を使用した。群集を蹴散らすことはできず、逆により大きな民衆の憤りを引き起こし、国際世論の非難を招いた。そこでいっそ成り行きに任せ、占拠区域を一掃することも対話することもせず、民衆の怒りが上昇し続けるのを手を拱いて見守ることにした。香港中文大学政治行政学系准教授の馬嶽は、これに対して次のように批判した。「政府の立場からすれば、時間が過ぎてゆけば、一部の市民に対して「占拠運動は目的を達成することはできない」という印象を強めることができるのに対し、政府は何もしないから（あるいは裁判所に悪者になってもらうから）、間違いを犯すことはない。もしも誰かが突破口を開けば、輿論はすぐに翻って政府を支持するようになるだろう¹¹⁾。」これもおそらくは行政長官梁振英お得意の算段——引き延ばしの一手で、占拠者の意志をくじくとともに、民意を逆転さ

⁹⁾ 『人民日報』：妄図搞「顔色革命」、港聞、香港新浪新聞（「カラー革命」をたくらむ）
<http://news.sina.com.hk/news/20141005/-2-3395420/1.html>、2014年12月20日閲覧。

¹⁰⁾ 程翔「顔色革命？ 子虚烏有！」（カラー革命？ でっち上げだ！）、『明報』、2014年10月22日。

¹¹⁾ 馬嶽「從危機到更深的危機」（危機からより深い危機へ）、『明報』、2014年11月24日。

せようとするものだ。表面的にはこの計略は功を奏したように見え、占拠が長引くにつれ、占拠に反対する声は確かに大きくなっていったが、こうした状況は「政府の怠慢」（馬嶽の言葉¹²）を示すものであり、梁振英に対して人々は、彼は何も仕事をせず、ただ権謀術数を弄しているだけだとして、いっそう悪い印象をもつようになった。『信報』創刊者の林行止は文章で次のように指摘した。「梁振英は何度も公に占拠者が違法行為をおこなっていると強調したが、これは占拠者に向けて話しているのではなく、逆に、理由も内情も知らない市民に向かって話をし、占拠している群衆が誠心誠意真の普通選挙を勝ち取ろうとしている行為を踏みにじっているのだ¹³。」彼はまた明末清初の文人侯方域の「天下に僥倖が重なり、天下の才子が厳正に働かなければ、役人や民衆はだめになる」という言葉を引用し、梁振英が権力をもてあそぶしか能がないことを諷刺している。このような行政長官がどうして「意気地」を示すことができようか。

「上の者が好むものを、下の者はさらに好む¹²」と言うように、長官がこのようなであれば、部下もまたそれに倣う。香港警察はもともと優秀なプロ集団で、彼らの誓いの言葉には「恐れず、私心をはさまず、他人に悪意をもたず、他人を敵視せず、衷心より懸命に職権を行使し、職務を遂行する」とある¹⁴。しかし「雨傘運動」において、デモ参加者のマスクをめくって胡椒スプレーを噴射したり、平和的にデモを行っている人の頭に警棒を振って流血させたりしたことや、さらには悪名高い「ヤクザ警察による暗がり殴打事件¹³」もあった。これらはいずれも不必要な武力であり、勝手に私的制裁を行った暴行であって、市民の強烈な反感を買っただけでなく、国際メディアからの関心も引き起こした。占拠運動において、警官隊はデモ鎮圧の道具に身を落としたのだ。

さらに、占拠者に対してヤクザ社会や中環占拠反対派の人が暴力を振るうのを、警察が何度も大目に見てきたことは、誰もが知っている。ある公務員が電子媒体に上げたことによると、9月30日銅鑼湾にいた彼は、10数名のヤクザが何人もの学生に殴りかかっているのをその目ではっきり見たが、すぐ近くにいた警官は見て見ぬふりをした¹⁵。また、占拠区域で多くの衝突事件が発生したが、たとえば10月3日には、多くの占拠反対派が旺角の占拠区域にやって来て、集まっている人々に対してけんかを売り、ののしり、ぶつかってきて、さらにはなぐりかかった。それによって多くの人が怪我をしたが、警察はまったく法を執行せず、市民の安全を度外視し、あまつさえ暴力を助長する始末であった。当然ながら、警察署長の曾偉雄の説いた「慈母論¹⁶」などは、逆説的な諷刺となり、世間が騒然とな

¹² 同上。

¹³ 林行止「三権分立踩界 権位失正混賬!」(三権分立の踏み倒し 政権はでたらめだ!),『信報』、2014年11月27日。

¹⁴ 「香港警察誓詞 - 維基百科, 自由的百科全書」<http://zh.wikipedia.org/zh-hk/%E9%A6%99%E6%B8%AF%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E8%AA%93%E8%A9%9E>、2014年12月10日閲覧。

¹⁵ 「有公務員批評警方縱容黑社会生事」(警察がヤクザ組織の起こす事件を大目に見ていることへの一公務員による批判)、『信報』、2014年10月6日。

¹⁶ 「[講清講楚] 曾偉雄: 警察保護示威者如慈母 (全片) 2014 12 10 - YouTube」、<https://youtube>。

った。

このような中央政府、このような特別行政区政府、このような行政長官、このような香港警察は、実際まったく「意気地」がなかったのである。

4. 香港人と政府はいかに「諦め」を体現したか

「いき」の第三の特徴は「諦め」であるが、九鬼周造はこう指摘している。「「いき」のうちの「諦め」したがって「無関心」は、世智辛い、つれない浮世の洗練を経てすっきりと垢抜けした心、現実に対する独断的な執着を離れた瀟洒としての未練のない恬淡無碍の心である¹⁷。」つまり、しかるべき経験を積んだ後、人は老練で脱俗の気風をまとい、事物にこだわらず、別次元の世界に流れてゆくのだ。

「雨傘運動」は後期を迎えると、双方が膠着状態を示し、運動がどのような方向に進むべきかを皆が考えるようになった。私は社会のいくつかの意見を整理し、政府と占拠者それぞれが異なる選択をした場合を分析し、四つの異なる状況が可能性としてありうると考えた。次頁の「政府／占拠者」の対照表を御覧いただきたい。

最終的に、状況2と状況3はどちらも出現しなかった。前者の「夜間外出禁止令」は香港経済に大きな打撃を与えるだろうし、後者の「政府本部包囲」や「ハンガーストライキ」も社会の広範な支持を得られなかった。

全体としては、状況1が最も理想的で、状況4が最悪である。しかし79日後、「雨傘運動」が幕を閉じた時、現実には状況1と状況4の間におさまった——政府はもちろん譲歩しはしなかったが、過度な武力を使用せず、法廷が布告した禁止令のみを利用して占拠区域を一掃した。一方、占拠者ももちろん引き下がらなかったが、猛烈に反抗して流血の衝突を招くこともなく、静かに警察に逮捕されるに任せた。

表面的には、こうした結末は円満に見えるが、実際は中央政府も特別行政区政府も、それに占拠者もまた「諦め」に到達しなかった。三者がいずれも執着を見せたからである。中央政府は敵対的思考の観点から問題を捉えることに執着し、「根本を棄て末節にこだわり、双方が別れ別れになる結末が避けられなくなった」（時事評論家の劉銳紹の言葉¹⁸）。特別行政区政府は、全国人民代表大会の枠組を死守することに執着し、香港市民の真の普通選挙に対する要求を完全に軽視したことで、より大きな民の怨みを買うことになった。占拠者たちは、実質的な成果を得ることにこだわり、「撤退する機会を三度失った」（劉銳紹の言葉¹⁹）。

com/watch?v=iQMrH7aKSlk、2014年12月15日閲覧。

¹⁷ 九鬼周造著、藤田正勝全注訳、『「いき」の構造』、p. 45。

¹⁸ 劉銳紹「占領運動該如何反思？」（占拠運動をどのように振り返るべきか？）、『明報』、2014年12月13日。

¹⁹ 同上。

	政府が譲歩する	政府が譲歩しない
占拠者が引き下がる	<p>状況1：双方が一步退く</p> <p>中央政府が善意を示し、特別行政区長官の梁振英と警察署長の曾偉雄に辞職を求め、民衆の怒りを静める。同時に五つの政治制度改革を停止し、全国人民代表大会常務委員会の決定を堅持しないことを承諾する。群衆は一応の成果を得て、潮時をみて矛を収め、引き下がる。</p>	<p>状況2：政府が進み、占拠者が退く</p> <p>警察がより殺傷力の高い武器を繰り出し、ゴム弾や装甲車や音波砲で群衆に対処する。しかし状況が一旦緩和すると、群衆はまた集結するため、警察は戒厳令を宣言し、夜間外出禁止令を実施する。群衆は引き下がらざるを得なくなる。</p>
占拠者が引き下がらない	<p>状況3：占拠者が進み、政府が退く</p> <p>群衆は引き下がろうとせず、占拠行動をエスカレートさせ、政府本部を包囲し、より多くの人にハンガーストライキを呼びかけ、世論や国際社会の非難を利用し、中央政府と特別行政区政府に圧力をかける。政府は事態が悪化するのを避けるため、譲歩するしかなくなる。</p>	<p>状況4：双方が全く譲らない</p> <p>警察が武力で占拠区域を一掃しようとし、群衆は猛烈に反抗し、流血事件が発生、六四の悲劇の再来となる。「雨傘運動」は流血のうちに収束し、中央政府、特別行政区政府、市民がいずれも敗者となる。</p>

ではいったいどうすれば「諦め」に達することができたのだろうか。上述の三者にはそれぞれ異なる出口があると考えられる。

中央政府は「友以外は敵」という敵対的思考を棄て、香港人が真の普通選挙を求める「雨傘運動」を「中国共産党政権の転覆を企むカラー革命」とみなすことをやめ、特別行政区政府に真に高度な自治の空間を与え、香港人に真の普通選挙を行う能力があることを信頼すれば、世界に対して「開かれた大国」の気概を示すことができる。

特別行政区政府は、「直ちに社会の各界の人々と率直に対話し、虚心に意見を聞き入れ、政治制度改革の解決をなしとげるべき」（学連常務委員、香港中文大学学生会会長の張秀賢の言葉²⁰）であり、占拠行動を単純化して「若者たちにはより上の生活を目指す機会が欠け

²⁰ 張秀賢「香港回不了去」（香港は戻れない）、『明報』、2014年12月13日。

ている²¹」と考え、「若者のダンスパーティーのような過去の活動や、とりとめのない若者政策²²」を推進すべきではない。

占拠者は実質的な成果が得られないことを失敗とみなすべきではない。陳健民教授が『明報』のインタビューを受けた際に示したように、「市民を啓蒙し、市民社会を強固にするという点から言えば、今回の行動はすでに実に多くの成果をあげている²³」。作家の梁文道も次のように指摘している。「今回の運動は、戴耀廷氏が述べているように、全国人民代表大会が決定を公布した際に、「失敗」に終わる運命だった（なぜならその目的は、もともと中央政府に譲歩を求め、候補者指名に制限を設けない特別行政区政府長官選挙を認めることにあったからだ）。それ以降、この運動は、成果を求めない道徳運動となったのだ²⁴。」

占拠者たちは、「市民社会」の経験をさまざまなコミュニティに植え付け、「民主移動教室」のような学者と庶民とが誠意を持って交流する講習会を継続して広め、また深めてゆくべきだ。若い世代には、投票年齢に達したら、すぐに有権者登録をし、さらには若者政당을組織し、自分の投票権や被選挙権を活用し、積極的に区議会や立法会の政治的あり方を改めようとし、中央政府や特別行政区政府に対して、占拠行動は終わっても、そこに蓄えられたエネルギーを決して見くびってはならないことを示すべきだ。

それぞれの側が執着を棄て、老練で脱俗の気風をまとうことさえできれば、必ず別次元の世界に流れてゆき、「諦め」に達することができ、香港と中国の政情もあらたな状況を迎えることができるはずだ。

5. 結語

この歴史上前例のない「雨傘運動」を、九鬼周造の構築した「いきの内包的構造」に適用して分析することは、読みの視点を広げ、哲学の名著である『いきの構造』に対しても、歴史的イベントである「雨傘運動」に対しても、思考をいっそう深めることにつながるだろう。

ここから言えるのは、優れた哲学理論は、民族、言語、文化、宗教信仰およびイデオロギーを問わないということだ。たとえ九鬼が『いきの構造』を日本語で著していたとしても、彼の「いき」に対する精緻な分析は、日本民族にしか分からないのではなく、より広い普遍的な意味を持っているのである。

ニュートンは、「私が人よりも遠くを見ているとすれば、それは、私が巨人の肩の上に立っているからです」と言った。今回私は九鬼周造の構築した枠組を通して、「雨傘運動」に

²¹ 「中国評論新聞：梁振英：占中事件突顯青年人向上流動等問題」（占中事件に見える若者の上昇志向などの問題）、<http://hk.crntt.com/doc/1035/0/4/0/103504001.html?coluid=176&kindid=11719&docid=103504001&mdate=1129151739>、2014年12月20日閲覧。

²² 前掲、張秀賢「香港回不了去」。

²³ 陳健民「不再搞社運用筆抗争」（社会運動はもう行わず、ペンで戦ってゆく）、『明報』、2014年12月9日。

²⁴ 梁文道「他們為什麼害怕占中」（彼らはなぜ占中運動を恐れるのか）、『明報』、2014年10月6日。

対して体系的な分析を試みたが、この東洋の巨人の肩の上に立って、より全面的な光景を見渡し、運動全体に対してより深い理解を得ることができたのだ。

後記

このたび、張政遠博士からの招待により、かつて日本哲学課に提出した論文を『希哲雑誌』に掲載していただくことになり、大変光栄に思う。

この4年前に書いた論文を読み返して、日本の哲学者である九鬼周造が構築した「いきの内包的構造」を用いて香港の「雨傘運動」を分析するのは、大胆な試みだったと今でも思う。この試みには、発表当時も疑問を投げかけられたものだった。

記憶をたどると、日本哲学課の専門演習中間報告会で、私はこの論文の大筋と重要な点を説明したが、すぐにある人から、「日本の哲学者が構築した枠組で、香港で起こった政治事件を分析するのは、筋違いなのではないか」と尋ねられた。彼は、「いき」を日本独特の美学意識だとみなし、他の国や民族には現れないものだと考えたのだ。

その当時私はこう答えた。九鬼は日本語で『いきの構造』を著したが、彼の「いき」に対する精緻な分析は、日本民族にしか分からないものではなく、この美学意識も、日本人の身にしか現れないのではない。魯迅は中国語で『阿Q正伝』を著し、自分自身をなぐさめる中国人の精神勝利法を諷刺したが、外国人が翻訳書を読みさえすれば、「阿Q精神」がどんなものかを理解することはできる。またある外国人が同じような考え方をして自分自身をなぐさめれば、我々は彼を「阿Q」として笑うことができるだろう。

私は一人の日本文化研究者として、日本の映画監督である是枝裕和が日本政府に対してとった態度を大変すばらしいと思う。彼が監督をした「万引き家族」は、カンヌ映画祭で最優秀作品としてパルム・ドール賞を獲得し、日本政府は彼に祝意を伝達する場に出席するよう求めたが、彼は拒絶した。その理由は、公権力と距離を保ちたいから、というものだった。

彼は次のようなすばらしい発言をしている。現在の社会が「大きな物語」に回収されていく状況の中で、映画監督としてできることは、その「大きな物語」(右であれ左であれ)に対峙し、その物語を相対化する多様な「小さな物語」を発信し続けることであり、それが結果的に文化をいっそう豊かにするのだ⁽¹⁴⁾、と。

芸術創作にせよ、学術研究にせよ、公権力と距離を保ち、二元対立的な状態を維持できれば、きっと作品に一層の生命力を与えることができるだろう——これこそ是枝裕和と九鬼周造から私が学んだ最も大事なことである。

2018年盛夏、東京にて

(原載：『希哲雑誌』第三期、2018年12月、翻訳：志野好伸)

訳注

- (1) 著者は黄錦容・黄文宏・内田康訳注『粹的構造』（台北市聯経出版事業股份有限公司、2009）に依拠している。
- (2) 「中華人民共和国香港特別行政区基本法」第45条に、「行政長官の選出方法は、香港特別行政区の実情と段階的原則に基づいて規定され、最終的には広範な代表性を有する指名委員会から民主的手順によって指名されたのち、普通選挙で選出されることを目標とする」とある。
- (3) 「愛と平和による中環の占拠を主張する」マニフェストを発表した三名の人物。
- (4) 体制派は親中派であるため、体制派に賛同する側は共産主義、共産党支持者であり、左派に分類される。
- (5) 香港市民支援愛国民主運動連合会の略称。支連会は1989年に成立。本文中の梁耀忠および朱耀明はその主要メンバー。
- (6) 九龍半島に位置する九龍群山の一つで、海拔495メートル。香港を象徴する存在。
- (7) 「義侠心を示すのは下層民、すぐに裏切るのは知識人（仗義每多屠狗輩，負心多是讀書人）」という言い回しを踏まえる。
- (8) 2000年代に旧共産圏で起こった政権交代を求める民主化運動を指す。ジョージアのバラ革命（2003年）や、ウクライナのオレンジ革命（2004年）など。旧共産圏以外の「アラブの春」と呼ばれるイスラーム圏の民主化運動を含める場合もある。中国では、こうした民主化運動の背景にはアメリカをはじめとする西側諸国の関与があるという見方が強い。
- (9) 1958年から続く学生組織。香港中文大学、嶺南大学、香港樹仁大学、香港科技大学の学生会から成る。当時のスポークスマンは、張秀賢。
- (10) 香港政府が導入しようとした道德教育に対する反対運動をきっかけとして黄之鋒が発起人となって2011年に成立。2016年に政党組織「香港衆志（デモシスト）」設立のため発展的解散。
- (11) 2014年8月31日の全国人民代表大会常務委員会で決定された、香港行政長官の立候補資格の制限を指す。
- (12) 『孟子』滕文公上の「上有好者、下必有甚焉者矣」に基づく。
- (13) 原文は「黒警暗角打鑊事件」。「七警案」などとも呼ばれる。2014年10月14日の夜、手錠をはめられ抵抗できないデモ参加者を警官たちが暗がりに連行し暴力を振るった事件。暴行に関わった7名の警官は、2017年3月有罪判決を受けた。
- (14) 是枝裕和「「invisible」という言葉を巡って——第71回カンヌ国際映画祭に参加して考えたこと——」、<http://www.kore-eda.com/message/20180605.html>、2020年2月20日閲覧。